

美少女悲々惨々

園田大造



始めに

例の如くにご挨拶申し上げます。作者の園田大造です。この度は拙作をお買いただき、お礼申し上げますが、この作品には残虐な表現が含まれている、というかしらございません。苦手な方は今からでも遅くはありませんので、どうか思い止まってください。

題名通り徹底的に悲惨な事になる美少女のお話です。老舗の呉服店の一人娘が素晴らしい美少女なもので、これに目を付けた変態サデイストの悪徳金融業者が、呉服店を経営している父親が人は良いけれど徹底的に無能なのにつけこんで赤子の手をひねる用に呉服店を破産させ、どさくさ紛れに拉致した美少女を、これだけ手間をかけたのだから、失踪した両親まで利用して肉体的にも精神的にも徹底的に苛みぬこう辱め抜こうと言う、なるほど悲惨なお話です。

ともあれ楽しんでいただければ、作者としてこれに勝る喜びはありません。

作者敬白

- | | | | |
|------------------|------|-------------------|------|
| 一、破綻した呉服店の娘の拉致 | 2P | 十三、こんなものと交わらされた後で | 171P |
| 二、訳の分からぬままに裸に | 7P | 十四、地獄の前にこんなものと | 190P |
| 三、とくとくと言いきかせる | 22P | 十五、本物の地獄が始まる | 207P |
| 四、拷問の最初は鞭打ち | 25P | 十六、こんな連中だからこそ | 225P |
| 五、いよいよ苛烈に責め苛む | 28P | 十七、いよいよ騷り殺しに | 227P |
| 六、屈服しても白状はしないと | 65P | 十八、騷り殺しだから当然苛烈 | 246P |
| 七、どうせなら激しく女にする | 82P | 十九、とにかく地獄にのたうたせ | 263P |
| 八、色々と女として鍛える | 98P | 二十、騷り殺しはなお執拗 | 280P |
| 九、余りに悲惨なニュース | 117P | 二十一、美少女の悲惨な末期 | 297P |
| 十、奴隷だから奴隷らしい姿に | 120P | | |
| 十一、そして淫らに鍛える | 137P | | |
| 十二、コウノトリの前にこんな者と | 154P | | |



「社長、そろそろ塚本呉服は破綻させてやりましょうか。この状態ならばうちが融資を打ち切ったならば即座に不渡りを出して破産という事になります。こんな山間の小都市で、そもそも今の世の中で呉服店なんてやっていける訳がない上に、あのボンボンの五代目はたかが知れた暖簾の上に胡坐をかいて何の手立てもしなかったのですから、しかもこちらの手の内にまんまのってしまっただけですから、当然と言えば当然ですし。」

表では町金融やら風俗やらを手広くやっていてそこその顔ではあるものの、裏では何をやっているのか知れたものではないとの悪名が高いが当の本人はそんな事など気にする素振もない白銀官兵衛に、金融部門の責任者で筆頭参謀格の芳養正大はいかにも気持ちよさそうに報告すると官兵衛は一見すれば紳士風だがその残忍無残で凄惨な本性を隠そうとせず、むしろいよいよ面白そうに、

「とは言うもののあの店舗と家屋の資産価値は相当なものがあるからな。まあ普通ならばさつさと店をたたんでマンションでもショッピングセンターでも立てれば左うちわで暮らせたものの、あのボンボンはあくまで先祖伝来、と言ってもたかが五代だが、の呉服業にこだわり続けたからな。まあそれに漬り込んだのがうちだから余り立派な事は言うつもりもないが、ところで担保物件の方はしっかり確保しているのだろうか。」

などと応じてくるが、ただしその顔にはただの融資の話をしているにしても異様にたぎったものを感じさせざるを得ないし、同じものは報告した芳養にも、そして傍らにいる副社長で官兵衛の女房の節子、昔はさぞ美人だったのだろうが今はでっぷり太った中年女で、どこか貪婪な豚さえ連想させる、や専務をしている息子の美津太郎、父親似の中々イケメンだがこの二人の子供だけあってやはり何ともおぞましいものをオーラの様に発散させている、二も激しく漂っている。

それでもちろん報告した芳養もなおさら一層面白そうで一、矢張り残忍な歓喜と興奮さえ激しく漂わせているのだが、ただしそれを今はとりあえずは押し隠しながら、

「ただし地元の金融機関も色々と転業のアイデアは持って行ったようですが、ただしあの社長は死んだ親の遺言だか何だかを墨守して、あくまで呉服屋にこだわっている処に、うちはその意思を尊重して、ただしその振りをしているだけなのは言うまでもないですが、ほぼ無条件に融資を続けたもので、あいつはころりとその気になって他の融資は全部打ち切って、格段に高利なのうちに乗り換えまできましたから、人の良いのいいが段々に気の毒になってくるほです。」

など言うものだから、その場にいた者たち、いうまでもなく幹部の会合だからその場には凶悪狂暴で、しかし見かけによらず慎重で気配りにも素晴らしいものがあるから、腕っぷしを求められる事やヤバイ仕事専ら任されている巨漢の権助秀信と具足蟲家康、さらに経理担当で中々な美人だがその代わり人間ら始祖は微塵も感じさせない田井紀伊なども同様にいかにも面白そうな笑みを浮かべていて、そこに何とも言えずたぎったものを感じさせている。そして芳養も益々面白そうだ。

「もちろんうちの貸付額はとくに担保物件の価格を上回っていますから、いつ融資を打ち切ったとしてもど個からも文句を言われる筋合いはありません。またうちが融資するのに胡坐をかいて赤字を垂れ流していたのは誰もが知る処ですから、うちがいつ融資を打ち切ってもだも文句は言わないでしょう。」

芳養はなおさら一層面白そうに言い、さらに言葉が続けて、

「とは言えその半分以上は利子ですから、さらに言えば向こうの番頭の須々木和昭は完全はこちらに寝返って、さらにその筋で三人の従業員全員も裏切ねよう話についていて、というよりもあんなものと心中なんかしたくはないのは誰もが一緒ですし、それ以上の理由があるのも言うまでもありませんが、融資した金のほとんどはうちの関連企業へつぎ込まれているので、例え破綻したとしてもうちが丸儲けなのと言うまでもないのは、皆が知つての通りですきぎね。」

と言っておいてさらに、

「しかもあの塚本呉服にはそんな担保物件以上の価値があるものが存在しますし、今回の件は最初からそれ狙いだったと言っても過言ではない。という訳で権助、具足蟲。そろそろ出番のようだな。」

といかにも面白そうに言い放つてくると、その部屋に漂っていた如何にも陰惨ではあるものの、それでいていかにもたぎっている雰囲気はなおさら一層煽られてくる処に、一人のセーラー服の少女が入ってくる。

ただしそれはセーラー服を着ていなければ本当に乗除なのかどうかさえも分からない、何ともグロテスクな少女で、髪こそ一応可愛らしくみつまみにして左右に垂らしなどしているが身長は一メートルしかないくせに顔の大きさは大の大人並みでねそれだけでも堪らずグロテスクだが、その上に頭は上に行くほど大きくなっているから異様に広い額には静脈が幾筋も浮かんでいて眉毛は薄くてほとんど見られないほどだ。目はめっかちの上に金壺眼だし鼻筋は明らかに左に曲がり、鼻の下は異様に短くて唇は三つに裂けて歯茎がむき出しになって、要はこれ以上グロテスクな少女の存在などちよっと想像もできないほどにグロテスクな少女だ。そしてそのグロテスクな一寸法師は雰囲気だけで何を話しているのか察したに違いない、そのグロテスクな顔にグロテスクな笑みを浮かべるなり、いい加減にしてくれと言った様子さえもあらわにしながら、

「好い加減にあの呉服店を破綻させるには十分な仕掛けは整ったのだろう。だったらさつさと破産させて恵美子を拉致して思い切り苛みぬいて、辱め抜いて私たちもたつぷりと楽

しみもして、同課でさらに設ける様にしてやらないか。何しろ私は毎日あいつを見せつけられていて、何しろあいつは性格が良くて私にも分け隔てなく接してくるし、私のりよしんがこんな事なんて知らないし、色んな意味で堪らなくなっているんだよ。」
と場も弁えずにそんな事を言い放つてきて、何だかその事には触れないでその会話を楽しんでいた気配のあるその部屋の者たちはなおさら一層面白そうだ。

「だって恵美子の様子ってそんな事なんておくびにだつて出さないけれども、よく見たらば鬱々として楽しまないって言うか、憂愁の雰囲気が強く漂っているからね。そしていよいよ堪らず魅力的になつていくからね。しかも美人で淑やかでとても優しい女の子だけれど、親孝行な娘だからきつと家の商売がうまくいっていない事なんて良く分かるし、みんなが何をたくらんでいるかも分からない私だと思っているの。」

そんな事を話してきて、そうなるとう官兵衛たちはなおさらに一層面白そうだし、言うまでもなくさつきから奥歯にものが挟まったようなものの言い方は要はこの黒テスクな一寸法師のクラスメートの塚本恵美子と言う美少女を、父親の呉服屋の破綻のどさくさ紛れに拉致して思うが儘に苛み辱めた挙句、最後はなるようにしてしまおうとの魂胆なのに違いなし。そしてこうもあからさまに言われたのでは今までの会話は何だったんだとでも言いだしそうな節子が、それでもなおさら面白そうだ。

「なるほどね、クラスメートだからなおさら嗜虐心を煽られていよいよ堪らないのはとっても良く分かるけれども、その我慢だつてしばらくだし、美味しいごちそうなんて我慢したからいただく方がおいしいのに決まっているからね。ところで最近彼氏ができたとか、そんな事はないだろうね。」

「ふふん、真面目だという以上に恥しがり屋で晩生な恵美子に限ってそんな事なんてある訳ないし、私たちと話していても会話が度きつくなると真ッ赤になるような女の子だよ。そんな事なんてある訳ないし、あつたらすぐにクラスの評判になる。まあ典型的な文学少女で学校内の文芸サークルで埒もない文芸誌に詩やエッセイ書いて喜んでるよ。」

節子はなおさら面白そうに問いかけられてきて、どうやら安威と言うらしい一寸法師は意気揚々と応じる。

この町ではきつての老舗であるの言うまでもないし、それなりの格式のある呉服屋の一人娘、塚本恵美子はそんな老舗の一人娘に相応しい淑やかで趣のある、どこか日本人形のような雰囲気さえ漂わせる十七歳、高校二年生の美少女で、まずこの町一番の美少女との評判を専らにしている。あえて言えば華やかさには多少かけるくらいはなくてもないけれども、その分控えめな淑やかさを感じさせ恵美子の魅力をなおさら一層際立たせている。さらには、本当はそんな事などある訳がないのだが、そんな事など自分では全く思っていないように振舞っていて、そんな自然な有様が彼女の魅力を益々一層高めている。もちろんそんな彼女だから誰とでも、それこそクラスメートだがグロテスクな一寸法師の安威とでもフランクに話していてが、きわどい話は徹底的に苦手で、友達などからは

『いくら老舗の呉服屋のお嬢様でも、そこまでお嬢様である事に一体何の意味があるの。』

と詰め寄られたりからかわれたりして、そしてその事に顔を赤らめたりしているそんな少女だったが、安威ならずとも最近彼女に憂愁の雰囲気が漂っているのに気付いていたが、その原因は言うまでもない、実家の呉服店の経営が、上手くいっていない事にある。もちろん恵美子だって馬鹿ではないから今時呉服屋なんか流行る訳がないし、老舗だ暖簾だと

言っても客は大規模店のチェーン店に流れる事くらいは分かっている。しかも父は情に深くていくら客が来なくても従業員を解雇する事もなく、さすがに恵美子も問いたただいたことがあるけれども、自部が気にする事ではないと一蹴されてしまったのだが、その父が安心していることそのものが、さらにこの少女の不安を掻き立てずにはおかないのだ。

というのは他でもない。父が安心してゐるのは白銀金融という金融会社が父の望むがままに融資してくれて、返済だって言うがままに猶予してくれるからに他ならない事を、恵美子は母を通じて知っているからだ。そして母が話してくれたことそのものが自身が不安に耐えきれなくなったからというのも分かっている、何しろ白銀金融と言えば町でも有名な金融会社で、金融会社と言えば聞こえが良いが少し古い言い方をすれば高利貸しで、しかも裏では何をしているのか分からないと街で噂になっているのは恵美子まで知っている存在で、そんなものが言うがままに金を融資されている時かされれば恵美子でなくても裏に何かがあるというのは分かる。しかもその社長間白銀官兵衛と専務で息子の美津太郎と言う若者、さらにそんな事は会社ですればよいのに、営業の責任者と言う芳養と言う男はことある事に恵美子の自宅にやってきて、父は乞われるままに恵美子に出てきて挨拶させるのだが、その度に何とも言えないおぞましい視線を恵美子に浴びせてきて、もちろん父の命綱だからそんな事を陰にでも口にできるものではないけれども、さらにはこの連中を信じ切っている父が取りあう訳もない事も分かっているからおさらだが、それだけに彼女の言い知れない不安をなおさらに掻き立てずはおれない。

さらに言えば白銀金融もやたらと融資するばかりで、父はと言えばそれで呉服を仕入れてくるのは当然だがその品質は恵美子が見てさえ分不相応な程に高額な、それこそこんなものは一体誰が買うんだと言う様な品ばかりで、しかもだからと言って販路の販売に励む訳ではないし、最近はこの連中に影響された訳ではないのだろうが盆等の須々木和昭以下三人の従業員たちまで自分を見る目が変わってきたように感じられて、さらには偶然街の喫茶店でその番頭の須々木と息子の美津太郎が親しげに話している様を目撃してから、何だか父と塚本屋が巨大な陰謀に巻き込まれているように感じられて、しかし父は相変わらず白銀金融を信頼しきっていて、これでは恵美子ならずとも不安にもなろうと言うものだ。さすがに恵美子は耐えきれなくなって父に問いただしたものの、実は父も段々と不安にはなっているらしくて、今までにないいらだった様子で遮ってきたりするもので、そして母は母でいよいよ雰囲気が暗くなって、そんな有様だから、恵美子だって憂愁の気配くらい漂ってこようと言うものだ。

「いいか、恵美子。今すぐ友達の家でも親せきの家でも良いからとにかく町から離れるんだ。それからもう家には近づくんじゃない。良いか、どんなことがあっても家に近づくんじゃないぞ。それから私も芳子もしばらく身を隠すから、当分は連絡は取らないけれども、決して探そうとするんじゃない。分かったな。しばらくは連絡は取らないけれども、全く心配はいらないからな。それからなるべく早く、とにかく町から離れるんだ、良いな。」

学校に連絡してくることなんか未だかつてなかったから、たまたま休憩時間だったこともあって取った父からの電話は一方的にそれだけ話して一方的に切られて、もちろん恵美子には訳が分からない。それにしてもただならない事があった事だけは理解できて、もちろんこんな事を言われて平然と従業員など受けていられるものではなくて、とにかく総体の手続きだけ取って、とは言われても家に近づくなど言われても小遣い前の彼女は昼食代に毛

の生えた程度の金しかもっていないし、どこかで厄介になるにしてもそこは年頃の女の子だからした下着の着替えくらいは持っていかなばならないと思つたとしても無理はない。さらには白銀金融、さらには白銀官兵衛たちの本当の恐ろしさも知らないし増して本当の目的が自分だという事も知らない恵美子が、とりあえず自宅の呉服屋に向かつたのも無理はない。それでも近くからしばらくうかがつて一見何もないのを確認し、ようやく勝手口から家に足をふみ入れた恵美子は誰もいない事に拍子抜けしながら荷物をまとめようとしている最中、突然背後から鼻と口をハンカチのようなものに覆われて、そのまま意識を失つてしまう。

地獄椅子で苛まれた際、家突き出されて官兵衛の別荘らしい建物の中庭を、塚本恵美子はその両腕を権助秀信と具足蟲に取られて連行されていた。とは言えその足はこんなにも徹底的に砕かれているのだから、ほとんど地面を引きずられるように連行されていて、もちろん全身を苛む激痛も一層残酷なら、こんなところで自分を待ち受けている運命を思えば、恵美子は一層恐ろしい。その体を激しく悶えさせのたうたせて、

「ぐうあうっ…ううっ…ヒグアキイイイッ…ヒキイイイイッ…殺さないで…お願いします…何でも…ああ…何でもするから…あうう…アヒギイイイイッ…あうあつ…ご主人様殺さないで…お願い許して…ご主人様許して…」

と有りつ丈の声を振り絞るようにして訴え哀願を繰り返していた。その目かきら恵美子自身とつくに枯れたと思つていた涙をとめどなく溢れ出させて、とつくに無駄とはわかつていてもそうやって哀願せざるを得ないさまが、その姿をなおさら無残で刺激的にしている。しかしまさしく鰐り殺そうと思つている残忍無残なサディストたちたちからしてみれば、処刑されようとしている生け贄はこうでなくては面白くもなく、従容と死につかれるなんて真つ平ごめん蒙るし、恵美子のような淑やかなお嬢様ならなおさらと言うものだ。当然そこには官兵衛たち家族の者たちや手下たち、もはや完全に手下と言うべき須々木たち塚本屋の使用人たちが揃つていて、これからこの美少女を待つ余りに苛烈な処刑への期待と興奮に見るからに異様に、何よりおぞましく盛り上がつていてその事さえもこの哀れな美少女を怯えさせずにはおかぬに違いない。

「グアヒキアアアアアッ…あうっ…うあうっ…お父さん助けて…お母さん助けて…死ぬのはいやあ…ヒアキイエエーエッ…アキヒイイイイッ…ひうあつ…お願い命だけは助けて…何でもするから助けてえーっ。」

一層無残な声を振り絞つて、その体をなおさら死に物狂いでのたうち回らせてなおさら無残に泣き狂いながら哀願を繰り返しているが、そんな恵美子が練功されたのは高さが一メートル余りの棒に支えられて地面と水平に立てられている直径が一メートル半余りの木製の車輪の処で、もちろん恵美子の淑やかで趣ある顔は凄まじい恐怖に強張らなければならない。ただし当然これでどうやって殺されるのかなど分かる訳がなく、戸惑った様子がさうに見ている者たちをなおさら喜ばせずにはおかぬ。まず三津太郎がいかに面白そうに、

「ふん、こんなに美人でお淑やかで性格だつて悪くないのに残忍無残に鰐り殺される、それが恵美子、こんなにも魅力的に生まれたお前の運命なのさ。で魅力的な分、特に残酷にあの世に送つてあげなければサディストの名が泣くからね、と言う訳で、あの車輪の出番なんだ。処で恵美子、あの車輪が一体どうやって使われると思うかい。」

と話しかけながら恵美子の髪を掴んでその車輪を見せつけてきて、ただしもちろん彼女にそんな事が分かる訳がなく、髪を掴む手を振り払うようなだれて首を激しく左右に振りながら、なおさら一層無残に泣きじやくるばかりで、その有様は益々一層無残で刺激的だ。そして当然のことながら三津太郎はなおさら一層面白そうだ。

「あれは西洋古来の車輪刑のための車輪なんだ。と言つてもまだ女子高生の恵美子には、何のことだか分からないだろうな。ふふ、『世界拷問処刑図鑑』によるとこれってどうもキリスト教以前の太陽信仰の影響もあるらしいのだけれど、西洋では大変にオーソドックスな処刑方法だから、日本人形みたいな風情のある恵美子とはちよつとしたミスマッ

チだけど、そこがまた面白いと僕たちは考えて、恵美子をこれにかけて処刑する事にしたのですよ。」

白銀は、しかしすぐにそんな恵美子の髪を掴み上げてそれを強引に見せつけながら話しかけてきて、しかし彼女は強く目を閉じていよいよと残忍な歓喜に溢れるような声で説明してきて、しかし当然恵美子は益々哀れに泣きじやくり泣き狂うばかりで、ちろんその姿はいよいよ哀れで、その責めの苛烈さを知っていればなおさら哀れで刺激的で、集中する視線は益々熱く激しくて、三津太郎もおさら面白そうだ。

「恵美子はこれから、そのしなやかなして死もう存分に苛まれている手足を粉々にへし折られてしまう。その上でその碎かれてしまった手足をあの手輪に巻き付けられることで固定される。でもきつとそれだけでも地獄の責め苦だろうと言う事は、かわいいだけではなくって結構成績優秀な恵美子にだって分かるだろうね。」

「ヒイイイイイッ：ヒイイイイイッ：ああひえ：ヒウギイエエーエッ：三津太郎様いやです：いやあーっ：あひあう：そんな事いやあーっ：ご主人様お願い助けて：あうひうっ：ヒギアヒイイイイイッ：お願い許してえーっ。」

そしてこの中々イケメンだけにおさらおぞましい若者の口から洩れる言葉の恐ろしさに耐えきれなくなつたに決まっている、耐えかねた様な声がこの哀れな美少女の唇からほとばしる。

ただしもちろんその姿はなおさら無残で哀れで、そしてそれだけ刺激的だ。三津太郎も益々残忍な笑みを浮かべて、むしろ益々面白そうに喋り続ける。

「そしてその状態で、ただしその体に肉の汁をその体に塗りたいくつてこの中庭に放置するんだ。すると恵美子、恵美子は一体どうなると思う。」

と益々面白そうに訊ねてきて、そして自分の言葉に余程興奮したのかその目と顔は異様にぎらついてきて、もちろんそれだけでも恵美子を怯えさせるのに十分過ぎる程だが、彼女はとつくにこれからどうなるかなど考えるどころではなくなつてしまっている。

「いやです：いやあーっ：死ぬなんていやあーっ：ヒグウキイイイイイッ：ああうっ：お願い助けて：三津太郎様助けて：あああ：うああっ：キヒイイイイイッ：お父さん助けて：そんな：そんな恐ろしい事：お願い許してえーっ。」

恵美子はともかくその体をさらに激しく戦慄かせて激しく無残に泣き狂い泣き叫びながら、その首を激しく左右に振るばかりで、とうぜん答えになどなつてもいないが、最初からそんなものなど期待もしていなかった三津太郎は、なおさら一層面白そうだ。

「それでは分かっているのかいのかさえ分らないけれど、恵美子は何しろ豚奴隷だから仕方がないか。とにかくそうしたらばカラスがその塗られた肉汁の臭いに惹かれてやつてきて、そして車輪に固定されている恵美子の肉を、そう、肉と言う肉を啄んで糞り取っていく事になるのですよ。ふふふ、ひふふ、恵美子はカラスのくちばしにより、全身の肉という肉を啄まれ、僕たちばかりではない、色んな生き物貫いて食った女の子の処や目の玉まで抉り出され、たっぷり時間をかけて哀れカラスの餌になつてしまうんだ。」

と話しかけてきて、余りの事に恵美子の目は見開かれっ放しで訴える言葉もない。しかも三津太郎の言葉はさらに続く。

「ふふ、何て面白くて刺激的な趣向だとは思われないかい。そうだろう、こんな美人でお淑やかで優しい十七歳の女子高生が、哀れカラスの餌になつて罌り殺しにされてしまうのだから、そう考えただけでぞくぞくしてこないかい。こんな素敵な美人のお嬢様に相応しい最後だとは思われないかい。」

三津太郎はようやく話し終わるが、恵美子にとってはそれは余りに残酷すぎて恐ろしすぎて、一体何をどう訴えたらいいのかもわからなくなってしまうに違いない、ただ唇を激しく戦慄させるばかりになってしまっていて、やがて耐えに耐えてきた気力も尽きてしまったに違いない、そのまま気を失ってぐったりと地面にへたり込んでしまう。

強壮剤が注射されて、恵美子は小さく呻きながら恐ろしい現実に引き戻されるが、当然の事ながらその時彼女の体はを直径が一メートル半ほどで下から棒で支えられている車輪の上に、その手足を大の字に広げて縛られていた。正確に言えば手手足は昨日から通されつ放しのワイヤーを地面に九十度ごとに打たれた杭に思いきり引き絞られて固定されているのだが、そんな事はどうでも良い。ともあれ恵美子は最初は状況を把握できないらしく、しばらく茫然とその目を見開いていたが、しかしすぐに自分はこの車輪の上で手足を砕かれて車輪に縛られて全身の肉をカラスに啄まれて鬨り殺される余りに苛烈な自分の運命がすぐに脳裏に蘇ってくる。その体はいきなり無残に戦慄きのたうったかと思うと、「死ぬなんていやです：いやあーっ：ひああう：ウアキヤアアアアッ：ヒイイイイッ：ああうっ：ヒウキイエエエッ：うああっ：ご主人様助けて：何でも：何でもするから：ヒアキヤアアアアッ：お願い殺さないで：ご主人様お許しを：いやあーっ。」と泣き狂い哀願し始めるが、しかしその様は取り囲んでいる官兵衛たちサディストたちをいよいよ喜ばせそらせるだけでしかなく、その余りに苛烈な鬨り殺しはさっそく始められる。そして周囲の興奮がなおさらに昂ってくる中。権助と具足蟲はそのやっぱり見れば見るほどに獣じみている顔に獣じみた笑みを浮かべて、大きなハンマーを手にして進み出てくる。

「ひひひふ、ひひ、既に好い加減に砕けてしまっているけれども足は膝から下だけだし、腕など一か所だけだからな。もつと素敵に縛り付けられるよう、もつと徹底的に砕いてあげような、豚奴隷の恵美子お嬢様。」

「信じられないかもしれないが、俺は前々から恵美子先輩の手足をこうしてグダグダに砕いてやる事を妄想していて、それが今叶うと言う訳だから堪らな。ただしこんな目に遭わせてりゃ、結構簡単に信じられるか。」

そして二人とも一層面白くて楽しそうに話してきて、もちろん恵美子の眼は余りに無残に見開かれて再び言葉を失って、その唇を激しく戦慄させるばかりになってしまう。しかしもちろんその有様は見ているサディストたちを一層喜ばせるばかりでしかなくて、こんなにも皆が寄ってたかつて鬨り抜いていたのだから、むしろ自分たちがグダグダとしやべる事もないくらいに思ったに違いない。まず権助が手にするハンマーを振り上げて、さすがに余りの恐ろしさに何かを訴えようとする彼女の唇から言葉がほとぼしるよりも先に、その右腕の二の腕と肘と手首の間の辺りに思いきり叩きつけた瞬間、

「グジャブジュ！」

という何とも言えない音が響くのと同時に恵美子はその目を零れんばかりに見開いて、「ぎああっ：ギヒウギヤアアアアッ：ギヒイイイッ：ヒイイイイッ：痛いーっ：権助様助けて：お願いやめて：ウギヤアアアアッ：うああっ：ヒイイイイッ：ヒギイイイイッ：痛いーっ：お母さん助けてえーっ。」

と有りつ丈の声で絶叫し哀願しながら、その大の字に縛られている体が弾むようにのたうって戦慄きながらのたうち回る。

しかしその時には彼女の右腕は完全に潰されてしまつて、厚さは半分あまりになつて血と肉と骨格がぐしゃぐしゃになつた煎餅のようになつてしまい、当然その激痛は残酷に過ぎるに決まつていて、見つめてゐるサディストたちの目はなお一層の激しさでぎらつてゐる。そしてこうなつては具足蟲だつて負けてはいられないし、権助に先を越されて若干口惜しそうに、

「それでは先輩を余り待たせるのも悪いから、僕だつて早速始めなければ。それに権助が腕をやつたのならば、僕はこうするより仕方がないものな。」

そしてそんな事を言いながら、各々手にしているハンマーを振り上げるなり、そして今度は左足の脛にその巨大なハンマーが叩きつける。もちろん場所が場所だけにその激痛は地獄に決まつてゐる。

「グズグズッ！」

「グギヤアキヤアアアッ：うぎいっ：ギグキヤアアアッ：ヒアギイイイイッ：痛いよーっ：助けて下さい：お願いです：があぎっ：グウギヤアアアッ：ウアギイイイイッ：ご主人様お許しを：こんな事やめてえーっ。」

同時に恵美子の口から、それこそ心臓が爆発してしまいそうな激痛に迸る絶叫がその部屋の空気を激しく震わせて、当然車輪の上に手足を大の字に広げて縛られている体は激しくのたうち狂つて苦悶する。もちろん既に無残に砕かれていた脛は今度こそ粉碎されて半分余りになり鮮血と肉片らしいものまで飛び散るが、しかし苛む方はさらに容赦はない。

「昨日あんな姿に縛り付けてあんな事をしておきながら、手足をどうして筆り取らないのか不思議に思つたが、なるほどこういう趣向だったのか。つてその場その場の思い付きで作品書いているのが見え見えの展開だな。」

「まあそんな事はどうでも良いからもっと徹底的に砕こうぜ。こんな暴露話が受けると思つてゐるのはどうせ作者だけだし。」

権助と具足蟲のそんな言葉が交わされる中、この二人のハンマーは今度は一時に振り下ろされて、左足の膝に右腕の肘をしたたかに叩きのめしてその手足をいよいよ残酷に粉碎する。

「グズグズジャッ！」

「ギュブジャッ！」

「がぎうえっ：ヒギウギイイイイッ：ヒギイイイイッ：痛いーっ：ご主人様痛い：助けてえーっ：ヒギウギヤアアアッ：ぐおうっ：お母さん助けて：誰か助けて：ギヒヤキヤアアアッ：ご主人様助けて：痛い：痛いーっ。」

もちろんその瞬間、恵美子は余りに無残に泣き狂い絶叫し、その体を弾むようにのたうち狂わせる。もちろんその手足をこうして砕かれたのだからその激痛は悪夢そのままだし、碎かなければならない処はまだたくさん残つてゐるし、碎かれ終わったらカラスの餌にされてしまふと思えば一層恐ろしい。

もちろん激痛が余りに凄絶で、一層無残に泣き狂い泣き叫ばねばならない恵美子のその有様はいよいよどうしようもなく無残で、サディストたちはさらに一層嗜虐心を煽られていて、当然その作業は容赦なく続く。

「どうだい恵美子。自分の手足を粉碎された気分は。しかしまだまだこれからだと言う訳で、今度はこんな所を砕いてやろうな。」

「てはおれはこつちにするか。きつとんでもない凄まじい激痛を味わう事になるんだろ
うな。ひひひ、いよいよ楽しみだ。」

そんな言葉がしたかと思うと、それと同時にさらに右足の腿と右腕の手首と肘の真ん中に
次々にハンマーが叩きつけられてしまう。

「ハギグズッ！」

「ガバジャッ！」

そしてその激痛が余りに凄まじかったからに違いない、口をパクパクとさせながら恵美子
はひたすらその体をのたうち狂わせていたが、そしてそれも僅かな間だ。

「ギヤヒギイエエエエエッ：ヒアギヤアアアッ：グウギヤアアアッ：ギイイ
ーイッ：痛いーっ：痛いわ：ぐあうあ：痛いよーっ：グギヒイイイーイッ：ああッ：グ
キヤアアアッ：死にたくない：助けて：恵美子を助けて：お願い許してえーっ。」

その次の瞬間には凄まじい激痛に無残にのた打ち回りながらさらに無惨な声を張り上げて
哀願し、泣き喚かなければならないが、しかし苛む方はいよいよ容赦はない。

さらに見ている官兵衛たちの興奮も高まる中、権助も具足蟲もその顔に一層残忍でおぞ
ましい笑みを浮かべるなり、そのハンマーをその既に十二分に残酷に苛まれて、既に元の
しなやかさを失いつつある手足に交代でハンマーを叩きつけて、時には同時に叩きつけ
て、その四肢をいよいよ無残に粉碎していく。

「グズブギッ！」

「ズブジャッ！」

「グズジュッ：。」

「ズブジュギ！」

「アグウギイエエエエッ：うああッ：ギアウキヤアアアッ：アギヤアアアッ：アギヤアアアッ
：痛いーっ：痛い：グヒヤアアアッ：がぎいっ：助けてください：お願い助けて：痛
いーっ：アギヤアアアッ：助けてお願い：いやだ：。」

もちろんこんなものは碎かれていくだけなおさらに凄絶さを増すのに決まっっていて、恵美
子の絶叫はますます凄絶さを増していく。一方見ている者たちも碎っていく者たちもなお
さら面白そうで、なおさら悪魔じみている笑みをその顔に浮かべている。

「ふふふ、まだまだこれからだぜ。しかしこれほどの美少女でお嬢様ならばやっぱりこち
らも頑張らなければならなくなる。それにしても手足も好い加減グダグダになってきたよ
うな気がするが。」

「それにしてもまさかこいつもこんな事になろうとは思ってもいなかったろうな。ふふ、
可哀想に。」

「そんな事よりも腿の辺りまで碎いてやろうじゃないか。何しろあの車輪に巻き付けてカ
ラスに啄ませようというのだから、無残なら無残なだけいいのだからな。」

「ガギバギッ！」

「ズジャズブ：。」

「ズブガギッ！」

「グズブズ：。」

「ギヤアギイエエエエッ：アグヒギヤアアアッ：アウギヤアアアッ：ああぐ
：痛いよーっ：お願い助けて：痛いーっ：ひぐうっ：いやだあーっ：グギウキイイイ
イッ：あぐおっ：お願い殺さないでえーっ。」

「ひひふ、ひひっ、まさか恵美子の手足を叩き潰すのがこんなに面白いとはな。」

「まあ妄想していた僕としては一際堪らないものがあるけれども、でねこれももうすぐお仕舞なんだよね。」

「ドブズジュッ！」

「ズブギッ…。」

「ズジュドズッ！」

見ている者たち、苛む者たちのたぎったような声や面白そうな声、ハンマーが手足を叩き潰す音、さらには恐ろしい絶叫が哀れな美少女の口からほとばしって、体はさらに無惨にのたうち狂うが、しかしそうすればするほどに集中する視線はなおさら熱さと激しさを増す。そんな中恵美子の手足は次々に奇妙に振じ曲げられて、骨格が派手な音を立てて次々に粉碎され、もちろん恵美子とははや凄絶な、それこそこのまま息絶えるかと思えるような声で泣き叫び絶叫し哀願してその部屋の空気を震わせ、その体は電撃にでも打たれたかのような勢いでのたうち狂って苦悶する。しかしもちろん権助と具足蟲はいよいよ一層面白そう二ハンマーを振るってその手足を益々徹底的に砕いていく。

しなやかだった手足をさらに徹底的に砕かれてしまった恵美子は、まるで壊れた人形のように車輪の上にぐったり横たわっていた。そしていよいよ一層無残で哀れな声を張り上げて、

「死にたくない…誰か助けて…あぐあう…グウギアアアアッ…ヒギアアアアッ…ぐげえう…ギヒウキイイイイッ…痛いーっ…ご主人様助けて…痛いーっ…アヒギイイイイイッ…ヒイイイイイッ…お母さん…神様助けてえーっ。」

と泣き狂いながら絶叫と哀願を繰り返していた。その拘束が既に解かれていたこともあって、その体は無残に戦慄しながら悶えていて、さらにその手足も無残に粉碎されていて砕けた骨がはみ出しなどして、早くもあり得ない方向に振じ曲がってその姿をなおさら無残にしている。さらにこんな姿にされてしまっていれば、その激痛は心臓が爆発してしまいそうな激痛に苛まれてるに違いないし、それはそうやって悶えている事により、その責め苦は一層残酷なのは恵美子も分かっているが、その責め苦の余りの残酷さはこの美少女にその体をじっとしている事さえも許されないに違いない。そう思えばそんな恵美子の姿はどうしようもなく無惨な光景だったが、しかし彼女を待つのはさらに恐ろしい車輪責めと、それに掛けられたままのカラスに啄まれることによる身の毛のよだつような処刑なのだ。官兵衛たちサデリストたちはしばらくそんな無惨な、そして振るいつきたくなるほど美しくて刺激的な生贄の姿を楽しんでいたが、しかしいくら無残であっても見ているばかりでは仕方がない。幾ら何でも息子に任せっ放しでは仕方がないと官兵衛がおもむろに進み出てくる。

「こうして見ていたって仕方がない。さあてそれではこの雌豚奴隷の恵美子を車輪に巻き付けてやろうじゃないか。そして明日はこのままカラスの餌にされる恐怖をたっぷり味わっていただこうじゃないか。それにしてもこんなに可愛いのにあんまり可哀想で、ひふふっ、ひひ、想像しただけでぞくぞくしてくる。」

そして何ともおぞましくて残忍な笑みを満面に浮かべていよいよ面白そうに声をかけると、もちろん三津太郎たちだって最初からそのつもりだし、当然その言葉が聞こえてしまったに違いない、恵美子の顔は凄まじい恐怖にひきつる。さらに何とか逃れようとするかのようにその体を一層激しく悶えさせながら、

「ヒグギヒイヒイヒイッ：あひいつ：ヒキヒイヒイヒイッ：ギアウキヤアアアッ：いやあーっ：お願いいやあーっ：助けてください：死：死ぬのはいや：うあううっ：キヒイヒイヒイッ：お母さん助けて：死にたくないよう：」

と無残な声を張り上げて泣き狂って哀願を繰り返すが、しかしそれはさらに一層無惨で哀れで当然刺激的で、ただ取り巻いている人の顔をした悪魔たちをさらに楽しませその嗜虐心を煽るばかりのことだ。

「ようし、それでは今度は豚畜奴隷の体を車輪に巻き付けてあげようよ。あんなに楽しませてくれたのだから、感謝の念も込めて思い切り刺激的な姿にしてあげて。」

今度は安威が残忍な歓喜に溢れるような声で指示する。

と、手下のサディストたちもまた残忍でおどましい興奮に憑かれた様に、まず恵美子の両腕を彼女の死に場所となるこの巨大な車輪に固定し始めるが、こんな有様だからただ縛りつけても仕方がない。

「いよいよ豚畜奴隷の恵美子はカラスの餌になるんだな。左腕はスポークの下にくぐらせるからちよつと強引に折り曲げてから、こつちに回してくれ。肘が砕けて自在に曲がるから何とかなるだろう。」

「確かに曲がるが恵美子はこんなに派手に泣き叫んで、ま、罨り殺しだから当然か。」

「こんなに可愛いくて淑やかなのに本当に可哀想。でその右の二の腕はそこでまげて、本当は曲がる処じゃないけれど構うまのか。大体このためにそうしたのだし。」

「グアウキヤアアアアアッ：ヒグギヤアアアアッ：アグキヒイヒイヒイッ：あぐあっ：お願い助けて：痛いーっ：ぐあえ：ご主人様助けて：ギヤキヒエエーエッ：ご主人様死にたくない：痛い：痛いーっ：ウアギヤアアアアッ：ヒギヒイヒイヒイッ：」

「ではこうやって左の腕は車軸受の上に出してあげないと面白くないよね。」

「肘の関節ってこつちに曲がるんだっけ。まあ粉碎してしまつていたらばこんなことも平気でできるから便利だね。」

連中の面白そうに話し合っている声に恵美子の無残な絶叫が交錯する中、関節も方向も無視して両腕を木製のスポークに縛るといふより巻き付け始めたのだ。まず両腕を横に伸ばしてその一本を巻くように、一度下をくぐらて再び上に出して両腕を貫くワイヤーにより車輪に嚴重に縛りつけていく。

もちろん何しろこんなに砕けてただでさえすさまじい激痛に苛まれる両腕をこんなにされるのだから、それだけで心臓が止まるかと思える激痛がこの哀れな美少女を貫いてくる。恵美子は一層無残な声を張り上げて、

「ギヤウキヤアアアアアッ：ヒグギヤアアアアッ：ウアギヤアアアアッ：キヒイヒイヒイッ：痛いーっ：あぐあっ：痛いーっ：お願い助けて：ギヤギヒエエーエッ：ご主人様助けて：あぐあっ：死にたくない：死ぬのはいやあーっ。」

と一層無惨に無惨に泣き狂い泣き叫び絶叫と哀願を繰り返しながら泣き悶える。しかしその腕は強引に捻じ曲げられながら、その横木を微妙に噛ませながら巻きつけられ、固定されていくがいくら任せたと云っても、こんなものを見せつけられれば官兵衛の家族たちだって手をこまねいてはいられない。まだ三津太郎は腕が固定し終わっていないにもかかわらずその無残に砕け切った左足を車輪に巻き付け始め、もちろんそれにこんなにしなやかで美しい足なのだから腕より一層折り曲げ固定し甲斐がある。たちまち須々木や芳養も加わって、まず恵美子の股間を極限まで左右に押し広げて、散々苛まれ抜かれている花芯はこれ以上ないほど無惨にさらけ出させてしまうが、今はそんなものに書かずありあつてはい

られない。恵美子もそれを羞しがる余裕などあるものではなく、そんな恵美子の碎けている膝を脛から下が上に来るように逆方向に振じ曲げて、脛を一度幅の下を通してそしてそれ自体碎けている足首を別の幅に縛りつけてしまう。つまりは無惨に碎かれている両足を、逆方向のM字型に広げる惨め極まりない姿にしていける。

もちろんサディストたちは両腕を関係なく折り曲げ巻き付けているのだから、その上にこんな事をされれば脳味噌を直接掻き回してくるかのような凄絶な激痛が全身を貫いてくる。この哀れな美少女はいよいよ有りつ丈の声を振り絞って、

「ウグヒャギヤアアアアアッ：ギヤヒイイイイッ：ぎやがあ：手足が千切れる：痛いーッ：グアギヤアアアアアッ：あうあッ：キアキヤアアアアッ：ヒグギイイイイッ：痛いよーッ：ああッ：ご主人様助けて：お父さん助けて：死ぬのはいやあーッ。」

と益々一層無惨な声を張り上げて泣き狂って絶叫するが、しかし膝から下は殊更激しく碎かれていて、この連中に益々容赦はない。碎けている骨がこすれ合って肉が千切れている余りに苛烈な激痛とともにスポークを通して固定されていき、さらにその体からは絶えず細かな音が聞こえていて、その事がその有様をなおさら一層無残で刺激的にする。やがてこの十八歳の若々しい魅力にあふれた美少女は、あたかも車輪に編み込まれたような姿にされてしまう。もちろんこんな恐ろしい姿で、カラスに体を啄まれるという恐怖も凄まじく、このまま気が狂ってしまいそう。もし本当に気が狂ってしまったら、その方が恵美子にとって余程幸運だったに違いないが、事前に注射されていた強壮剤は彼女にそれすら許さず、その有様はいよいよ無残にする。

もちろん一層無残な姿にされてしまった恵美子は、こんなにされてしまった自分自身の事が信じられないかのように、その美しい目を見開いていた。そして一層無残な声さえ振り絞るようにして、

「グアウキヤアアアアアッ：ヒグギヤアアアアアッ：ギヤヒキヤアアアアッ：うがあッ：アグギヤアアアアアッ：痛いわ：お願い殺さないで：ぐうえッ：殺さないで：ヒアギイエエーエッ：グキヤアアアアアッ：ご主人様助けて：痛いーッ。」

と泣き狂ってひたすら絶叫と哀願を繰り返していた。そしてのたうつこともできない体を絶えず小刻みに戦慄かせていたのだが、その姿は何とも形容しようがない程に無残だ。まず右腕は真横に伸ばしているものの碎かれた肘で真上に捻じ曲げられて、一旦スポークの下を通しておいて手首はその上に引き出されてワイヤーにスポークに固定され、左腕は斜め上へと向けられスポークの下を通されながら二の腕の半ばで真横に向けられ肘で再び真横に向けられている。両足は右はやや斜め下に向け、左は斜め上に向けて股間を百八十度広げられているのとはかくも、右足の膝は無理やり直角に真上に向けられて、しかもやつぱり振じりあげられてスポークの下を通して、左足は本来曲がるはずのない上に捻じ曲げられてこちらは足首をスポークの下に向けられて通されたワイヤーで車輪に固定されている。もちろんその様は一層無残で、グロテスクで、ある種前衛芸術のオブジェのようで、悪魔のようなサディストたちにはそれはさらにたまらない眺めだが、特に男たちにすれば嗜虐心に加え、さらに劣情までも催してくるのをどうすることもできない。

そしてこんな事になれば地位も身分もある客たちより、仲間内から半ば獣とみなされている権助と具足蟲の出番だ。必ずしもそんな存在でもないのだが、それを演じるのが自分たちの役割と割り切っている二人は、

「ひふふ、ひひつ、どうせこんなものを見せられたならば、それは一発や二発、やらずにはおれなくなってきたんだろう。どうせカラスの餌になっちゃうのだから、やってしまっただろうなのさ。」

「それに今更潔癖ぶったり恥じらったりした処で仕方がないし、洋梨や硫酸であんな事をされればきれいなものだろうし。」

などと言いながら進み出てきて、まず権助が車輪の上に手足を巻き付けられて横たわっている恵美子の体に、もちろんグロテスクな肉塊もむき出しにして覆いかぶさっていくなりいきなりその体を貫いて、もちろんこんな状態で男に体を食られるのはいよいよ一層の責め苦だったに違いないし、まして相手は後輩のサディストたちなのだ。恵美子はその目をいよいよ信じられないように大きく見開いてさらに無残な声を振り絞るようにして、

「グオウギヤアアアアッ：ヒグギイイイイッ：グウキヤアアアッ：ぐあうっ：お願いいやあーっ：権助：権助様許してえーっ：ヒアギイイイイッ：ああうっ：痛いーっ：死にたくない：具足蟲様助けて：アグキヤアアアッ：。」

と泣き狂って絶叫し始める。

しかし当然そんな無残な生贄の美少女の有様は取り囲んで見ているサディストたちを喜ばせるばかりだし、もちろん他の者たちだってさらに一層劣情やら嗜虐心やらを煽らずにはおかず、もう十分すぎるほどにそそっている。今度は具足蟲がその巨大な肉塊をむき出しにしてその顔の上に馬乗りになってその泣き狂っている口腔に自身のグロテスクな肉塊を激しくねじ込んできてその声は無残なうめき声へと変わらなければならない。そしてこの男もいよいよ面白そうに、

「どうせ泣いたり喚いたりする声ならば明日好きなだけ聞けるのだから。だったら今はこの感触を堪能するほうが賢い選択だと思うのだけれど、ふふ、淫畜奴隷の恵美子はどう思う。」

と聞きながら一層激しくその腰をゆすつてきて、もちろん恵美子はどうすることもできないままに地獄の責め苦と恐怖に呻吟しながらその体を食られ放題になっ